

第34回 カメムシ

カコちせん かほくがた子ルドレン
も ショウくん



河北潟周辺に広がる田園地帯では、8月の初旬にラジコンヘリが空を舞い農薬を散布する風景が見られます。散布される農薬は、主にスタークルという品名で、ツマグロヨコバイ、カメムシ類、ウンカ類に対して高い防除作用を持つとされるジノテフランという成分を10%ほど含んでいます。通常は300~1000倍程度に希釈して使用されますが、無人ヘリによる散布の場合は8倍希釈、つまり最大125倍の濃度で使用されています。ジノテフランはいわゆるネオニコチノイド系といわれ、昆虫類の神経系に作用して神経を興奮させ続けることで死に至らせるものとされています。重要な特徴として水溶性で作物への浸透性が高いことと分解しにくいことがあり、製品のデータシートによると「有効成分は速やかに稲体内へ浸透移行し、長い残効性と耐雨性を示」すとされています。

どうして、そうした農薬が高濃度で広範囲に散布されるかということ、「特にカメムシ類には殺虫効果と吸汁阻害効果で斑点米被害を効果的に防除」するとされているからです。斑点米というのは登熟期にカメムシ類の加害を受けたことで黒点を有する米のことです。この米が精米した段階で千粒のうち2粒含まれると、米穀検査の際に2等級とされ、60kgあたりの米の価格が約1割ほど低くなります。2014年度石川県産コシヒカリの農協の買い取り価格（概算金）は、60kgあたり10,000円で、農家にとっては既に大暴落となっている生産者米価がさらに低くなるため、カメムシが防除できるという農薬に頼ることになります。

しかし、実際に私たちが調べたところ、河北潟の周辺の水田にはもともとカメムシ類はそれほど多くありませんで

した。これをカメムシ徹底防除の名目で、殺虫剤の空中散布と除草剤による畦の徹底除草が長年続けられてきた効果とも見ることができますが、実は、圃場に隣接する森林や草原の少ない河北潟周辺では、カメムシ類がもともと発生しにくいものとも考えられます。また、全国的に農薬を使うようになって、深刻な害虫被害がみられるようになったというデータや、農薬を使っていない有機栽培水田や農薬を減らした特別栽培田の方が、通常の農薬防除をしている水田より斑点米の発生が少ないことを示す傍証も見られます。

今回は農薬防除の話題が主になってしまいましたが、斑点米の被害をもたらすカメムシ類は一部で、他の害虫を食べる天敵となるカメムシ類もいます。いろいろな虫がいて、それらの食う食われる関係が成立している水田をつくるのが、害虫被害を軽減する最良の方法かも知れません。カメムシだけでなくあらゆる虫がいない田んぼでは、虫を餌とするカエルもいなくなります。そんな田んぼは、侵入に成功した害虫にとっては天国です。もう農薬を撒き続ける以外に防除の方法がありません。（文 高橋 久）